# トルストイ：『イヴァン・イリイチの死』

増田　悟

トルストイの小説『イヴァン・イリイチの死』(1886)の第6章、第7章からいくつかのパッセージを選び、それに基づいて彼の思想についての考察を試みることとする。

まず、第6章の半ばで、主人公が自らの死を自覚し、そこから逃れようとする場面である。

> То он гиворил себе: «Займусь службой, ведь я жил же ею». И он шел в суд, отгоняя от себя всякие сомнения; вступал в разговоры с товарищами и садился, по старой привычке рассеянно, задумчивым взглядом окидывая толпу и обеими исхудавшими руками опираясь на ручки дубового кресла, так же, как обыкновенно, перегибаясь к товарищу, подвигая дело, перешептываясь, и потом, вдруг вскидывая глаза и прямо усаживаясь, произносил известные слова и начинал дело. Но вдруг в середине боль в боку, не обращая никакого внимания на период развития дела, начинала свое сосущее дело. （８７：数字はテクストのページ数。以下同様）

> あるときは、彼は自分にこう言い聞かせた、「仕事に身を入れよう。何しろ私はそれでもって生きているのだ。」そして彼は、あらゆる疑いを追い払いつつ、裁判所へ出かけて行った。同僚たちと話をして、昔からの習慣どうりにぼんやりしながら席につき、物思わしげな視線を人々の群れの方へ投げ、痩せ細った両手で樫の椅子のひじ掛けにもたれて、いつもと同じように、同僚の方へ身体を曲げ、書類をちょっと動かし、ひそひそ声で話して、それから突然視線を上げ、まっすぐ席について、おきまりの言葉を口にして裁判を始めるのだった。しかし突然その途中で、脇腹の痛みが、事態の成り行きの時期には何の注意も払わずに、自らの吸うような仕事を始めるのだった。

このように、副動詞現在が繰り返し使われていることがわかる（ отгоняя, оки-

дывая, опираясь, перегибаясь, подвигая, перешептываясь, вскидывая, усаживаясь ）。副動詞現在は原則として主文の動詞との時の同時を表すと考えられるので、これらを執拗に用いることにより、主人公の決まりきった日常生活が描写されている。また、по старой привычке: так же, как обыкновенно: известные слова の様な用語の使用も、主人公の平凡な社会生活の様子を示している。規則や約束事によって定められた不自然なものは、トルストイにとっては否定されるべきものであった。１９世紀ブルジョア社会の一員であるイヴァン・イリイチの社会生活はその典型である。

他に目につくものとして、делоという語の多用が挙げられる。上の和訳では、「書類」、「裁判」、「事態」、「仕事」と訳してあるが、原文では全てделоとなっている。繰り返し用いられるこの極めて多義である語が、主人公の行為の平凡さを象徴しているとは考えられないだろうか。また、４つのделоのうち、最初の３つは主人公の動作の描写であり、最後の１つは「脇腹の痛み（боль в боку ）」が主体である。この後でもбольはона という代名詞の形でしばしば現れる（она=смерть とも考えられる）が、このような擬人法を通じて一種の「立場の逆転」が暗示されている。つまり、他人を「裁く」立場であったイヴァン・イリイチが、「痛み・死」という存在によって「裁かれる」立場になったということになる。死の恐怖に直面することによって、官僚社会という既成の価値基準が否定される様子が描かれていると言えるだろう。

次に、第７章の冒頭である。

> Как это сделалось на третьем месяце болезни Ивана Ильича, нельзя было сказать, потому что это делалось шаг за шагом, незаметно, но сделалось то, что и жена, и дочь, и сын его, и прислуга, и знакомые, и доктора, и, главное, он сам — знали, что весь интерес в нем для других состоит только в том, скоро ли, наконец, он опростает место, освободит живых от стеснения, производимого его присутствием, и сам освободится от своих страданий. （８９）

> イヴァン・イリイチが病気になって３か月目で、どのようにしてこんなことが起こったのかを語ることは出来ない。何故ならそれは一歩一歩目立たぬように起こったからである。しかし、次のような事が生じた。つまり、彼の妻、娘、息子、召使、知人、医者、そして何より

も彼自身が知ってしまったのだ。まもなく彼が、ついに場所を空けてくれるのかどうか、彼の存在によって生じる圧迫感から生きている人々を開放してくれるのかどうか、そして彼自身が自らの苦しみから開放されるのかどうかということのみに、彼についての他の人々の関心があるのだということを。

職場における主人公の様子の変化に続いて、ここでは家族における人間関係の変化、つまりそれまでは当然かつ不変のものと思われていた夫婦間や親子間の関係が崩壊する様子が描かれている。その様子を示すものの１つに、《опростает место》（「場所をあける」）という語句の使用が挙げられる。このような俗語を用いることにより、イヴァン・イリイチの周囲の人間たちの道徳性の低さや偽善が暗示されている。最も基本的な生活単位である家族関係までもが、ここでは批判的に描かれている。

先に挙げた第７章の冒頭には、以下のように続く。

Он спал меньше и меньше; ему давали опиум и начали прыскать морфином. Но это не облегчало его. Тупая тоска, которую он испытывал в полуусыпленном состоянии, сначала только облегчала его как что-то новое, но потом она стала так же или еще более мучительна, чем откровенная боль.

Ему готовили особенные кушанья по предписанию врачей; но кушанья эти все были для него безвкуснее и безвкуснее, отвратительнее и отвратительнее.

Для испражнений его тоже были сделаны особые приспособления, и всякий раз это было мученье. Мученье от нечистоты, неприличия и запаха, от сознания того, что в этом должен участвовать другой человек.（８９）

彼は、だんだん少ししか眠れなくなってきた。阿片が与えられ、モルヒネが注射され始めた。しかしこれも彼を楽にしてくれなかった。半ば眠った状態で彼が体験したぼんやりした憂鬱は、始めのうちは何か新しいもののように、彼を楽にしてはくれたが、後にはその憂鬱は、あからさまな痛みと同じぐらい、あるいはそれ以上に苦しいもの

になった。

医者の指示により特別な料理が彼には調理された。しかしこの料理は全て彼にとってはだんだん味のない、不快なものになっていった。

彼の排便のためにも特別な設備が用意された。そして毎回これが苦痛になった。不潔、不体裁、臭い、そしてその際他人が立ち会わねばならないという意識が原因の苦痛であった。

イヴァン・イリイチの社会生活、家族関係の変化に続いて、彼の個人的生活における変化が描写されている。睡眠、食事、排便といった人間の生命の根本ともいえる3つの側面に施された処置とその影響は次のようになっている。

《 спать 》—《 опиум 》, 《 морфин 》—《 более мучительна 》.

《 кушанья 》—《 особенные кушанья по предписанию врачей 》
—《 безвкуснее; отвратительнее 》.

《 испражнение 》—《 особые приспособления 》—《 мученье 》.

つまり、医学や化学物質といったものによる処置は、より一層の苦痛を導く否定的な物とされている。また、後で述べる「幼児性への退行」といったものがここに見て取られることも指摘しておく。発達した科学や文明は、トルストイにとっては無価値で否定されるべきものである。

その科学や文明に対立する存在として登場するのが下男のゲラーシムである。彼に関する記述は次のようなものである。

Герасим был чистый, свежий, раздобревший на городских харчах молодой мужик. Всегда веселый, ясный. (89)

ゲラーシムは、さっぱりして、生気にあふれて、都会の食べ物で肥えふとった若者だった。いつも快活で明るかった。

Вошел в толстых сапогах, распространяя вокруг себя приятный запах дегтя от сапог и свежести зимнего воздуха, легкой сильной поступью Герасим, в посконном чистом фартуке и чистой ситцевой рубахе, с засученными на голых, сильных, молодых руках рукавами, …… (90)

太い長靴をはき、その長靴から出るタールのいい匂いと、冬の空気のさわやかさを自分のまわりに発散しながら、軽やかな力強い足取りで、ゲラーシムが入って来た。手製の麻で作られた清潔な前掛けと、清潔な更紗のシャツを身につけて、袖をまくり上げて、力強く若々しい腕をむき出しにしていた、……

Герасим (……) и быстрым движением повернул к больному свое свежее, доброе, простое, молодое лицо, только что начинавшее обрастать бородой. (90)

ゲラーシムは(……)元気で、善良で、純朴で、若々しい、やっとひげが生え始めたばかりの顔を、すばやい動作で病人の方へ向けた。

このように、ゲラーシムという人物像は多くの形容詞を重ねることによって構成されている。上に引用した部分も含めて代表的なものを挙げれば次のようになる。

чистый, свежий, молодой, веселый, ясный, приятный, сильный, добрый, простой, ловкий

これらの形容詞から、ある一定の人物像が浮かび上がってくる。それは、ブルジョア社会の一員であるイヴァン・イリイチとは反対に、文明の悪影響を受けず、自然で純朴で善良なイメージである。ここではゲラーシムは、一人の登場人物として物語に加わると同時に、「文明・虚偽」に対立する「自然・民衆」という機能としての肯定的役割を演じている。自然を称賛し、文明を否定するというトルストイの中心思想がここに現れている。

このゲラーシムとの接触を通じて、イヴァン・イリイチは自分の生活に存在する「虚」を自覚することになる。

Главное мученье Ивана Ильича была ложь,— та, всеми почему-то признанная ложь, что он только болен, а не умирает, и что ему надо только быть спокойным и лечиться, и тогда что-то выйдет очень хорошее. (91)

イヴァン・イリイチの主な苦しみは、嘘であった —— 彼はただ病気なだけであって死ぬことはない、安静にして治療を受けているだけ

でよいので、そうすればとても良いことが生じるだろうという、なぜか皆に承認されている嘘であった。

主人公が体験する「嘘」は、彼の生活全般に存在する「嘘」の象徴であり、イヴァン・イリイチはこの僅かな「嘘」を自覚することを通じて、自らが所属する社会を直視するようになる。虚偽、偽善といったものはトルストイの思想においては真先に否定されるべきものであり、「自然・民衆」の象徴であるゲラーシムとの交流を通じてのみ、イヴァン・イリイチは自分の周囲の環境に対する不信感を抱くようになり、そして次の様な考えに至る。

Кроме этой лжи, или вследствие ее, мучительнее всего было для Ивана Ильича то, что никто не жалел его так, как ему хотелось, чтобы его жалели: Ивану Ильичу в иные минуты, после долгих страданий, больше всего хотелось, как ему ни совестно бы было признаться в этом,— хотелось того, чтоб его, как дитя больное, пожалел бы кто-нибудь. Ему хотелось, чтоб его приласкали, поцеловали, поплакали бы над ним, как ласкают и утешают детей.（９２）

このような嘘の他に、あるいはその結果、イヴァン・イリイチにとって何よりも苦しかったのは、誰も彼のことを、彼自身が望んでいるように憐れんではくれないということだった。長い苦痛のあと、時としてイヴァン・イリイチは、打ち明けるのも恥ずかしいことではあったが、何よりも次のようなことを望んだ———つまり、誰でもいいから、彼のことを病気の子供のように憐れんでくれることを望んだのである。子供のことを可愛がったり慰めたりするように、自分のことをあやしたり、接吻したり、自分に対して涙を流してくれることを彼は望んだのである。

以前とは異なった考え方を持つようになったイヴァン・イリイチは、病気にかかるまでの人生とは別の、いわば「第２の人生」を送ることを無意識のうちに望むようになる。それを暗示しているのが上の文章である。この文章から感じられるのは、「幼年時代への回帰」、「幼児性への退行」といった意識である。決まり切った

約束事や文明との関係を放棄して、より自然に近い状態である幼年時代を志向する段階まで主人公の精神状態が変化したことをこれらは示していると考えられる。しかし、このままでは本当の意味での「第２の人生」を送ることにはならない。まだイヴァン・イリイチは「現実からの逃避」といった、トルストイが目指したものとは異なる段階にいるのであり、死の直前までこの状態は続くことになる。

１９世紀ロシアにおける文明社会の象徴としてのイヴァン・イリイチが体験するこのような出来事を通じてトルストイは、「文明・不自然」を否定し、「自然・民衆」を賛美するという自らの中心思想を展開していると言える。

---

参考文献


1. Толстой Л. Н. 《 Собр. соч. в 22 томах, т. 12 》 М., 1982
（本文におけるテクストとはこの巻を指す。）
2. ред. Кожина А. Н. 《 Язык Л. Н. Толстого 》 М., 1979
3. Wasiolek E. 《 Tolstoy's major fiction 》 Chicago, 1978
4. Опульская Л. Д. 《 Л. Н. Толстой. Материалы к биографии с 1886 по 1892 год 》 М., 1979
5. Линков В. Я. 《 Мир и человек в творчестве Л. Толстого и И. Бунина 》 М., 1989
6. ウラジーミル・ナボコフ，小笠原豊樹訳　『ロシア文学講義』，ＴＢＳブリタニカ，1982
7. 川端香男里　『人類の知的遺産　52　トルストイ』，講談社，1982